
異世界行きチケットを拾いました。

夏目 ゆずは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界行きチケットを拾いました。

【Nコード】

N2104BA

【作者名】

夏目 ゆずは

【あらすじ】

仕事帰りの寄り道で「異世界旅行チケット11枚つづり」を拾いました。

さらになぜか自分の所有になってしまい、本来のチケットの持ち主異世界のイケメンと成り行きで異世界旅行に同行する羽目に……

そのチケットが案内する異世界はどうにもおかしなところばかり。こんなことなら拾うんじゃなかったと後悔しても遅かった……

残るチケットを使いきるまで果たして無事にもどれるのか？

巻きこまれた能天気なお気楽OLと、歪んだマニアックな理想の恋人を探す異世界のイケメンとの奇妙な珍旅行のお話。

恋愛要素はほぼ皆無です。ほのぼの、どたばたといった感じで話は進みます。

あなたがこのチケットを手に入れたら、どんな異世界に行きたいですか？

連載は初めてです。

かなり都合のいい話だと自分でも思ってますが、ひまつぶし程度に読んでいただけるとうれしいです。

登場人物は作者様の好きな女優さんや俳優さんをアテレコしてみてください。

そのため、わざと容姿や性格はざっくりばかりかしてあります。

異世界チケットを拾いました、イケメン付きで。（前書き）

短編に納まらなくなり、連載にしてみました。

これはもし自分がこんなチケットを拾ったらどこに行ってみたいかな？とふと思いついた行きあたりばったりなお話です。各異世界の滞在時間は短いので、世界観は読者様のご塑像に任せたいと思います。かなり適当な設定なので、暇つぶし程度にいただければ幸いです。

異世界チケットを拾いました、イケメン付きで。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「異世界旅行チケット10回券；サービスで1枚追加キャンペーン
中」

「・・・こんなの拾った。仕事終わりの夕方、ふと寄った公園のベンチの下で拾った「異世界旅行チケット」と書かれた怪しげな11枚つづりのチケット。1枚使ってるみたいだけど。
ものすごく安い作りで子供の作品？と思うほど。
誰かの忘れものなら交番に届けようかな？と思ったんだけど・・・
・これは届けようにも、ねえ・・・。」

しばらくこのチケットの持ち主が探しにくるかベンチに座って待っていたけど、なぜか公園は無人数状態で・・・。
正直どうしたものかと、チケットのうらを何気なく見ると・・・
説明が記載されていた。

- ・各チケットには高性能人工知能ナビがついています。チケットを使いきるまで安全・安心なナビをいたします。
- ・基点となる場所の次元軸設定をお忘れなく！
- ・チケットを使用されると自動的にその世界に適した言語翻訳・服装・髪形になるサービス付きです。
- ・盗難防止のため、購入後速やかにDNA登録などの個体識別登録をおススメします。このチケットで最大二人まで登録可能です。

・払い戻しは受け付けしておりません。
・万が一、異世界で起きた事件・事故につきまして当社は一切の責任を負いません。すべてお客様の自己責任となります、好戦的な区域の旅行につきましてはくれぐれもお気を付けください。

・詳しい内容は、「異世界旅行チケットサービスセンターホームページ」にて、旅行条件の確認をお勧めします。URLは*****

*****etc

・・・えー、なんだろこれ。子供が作ったにしては作りこんでるよねえ。ぱつと見は、寂れて潰れそうな遊園地のチケットつづりにしか見えないんだけど。

でも、こんなので異世界に行けるならちよつと行ってみたいかも？

「しっかし、異世界ねー。このつまらない日常から抜けられるならどこでもいいけど。王道で魔法が使えるとことか?!なんてねー、・・・ぶえつくしゅっい!」
つぶやきながらチケットを見ていたら、夕方の冷えた空気で思わずくしゃみをしてしまった。

「あ・・・、チケットに思い切りくしゃみしてしまった。うわー、唾が飛んだ。拭かなきゃ、えーつと拭くもの拭くもの・・・」
チケットをそばにおいて鞆から拭くものを探していたら、急にチケットが光り出した。

-----DNAデータを受け取りました。解析を
始めます。・・・現在、惑星の位置基本次元軸を「地球」に設定・・・
種族・・・性別・・・年齢・・・体重・・・ピー・・・解析完了
しました。このチケットは、*****様と、立花杏子さま専用となりました。それでは、よい旅をお楽しみください。なお、御用の際はA Iナビをお呼びください。-----

「……は？睡で？DNA登録できたの？……って、これ本物の……？」

急に光りだしたチケットは、ピカピカ光ってるし宙にふわふわ浮いてる。本物の……？

「えー、これ使っているのかなあ？」

光るチケットを見つめたまま途方に暮れていたその時、

「勝手に使ってもらっては困ります、それは僕が彼女と旅行するために購入したんですから」

チケットを持つ私の前に、突然長身の黒髪長髪イケメンが出現しました。長身すぎる、見上げたら首が痛い。2mはありそう！私は160センチないんだから……

ぼかんとしている私に向かって彼は叫んだ。

「だから、そのチケットは僕が！彼女と旅行に使おうと思って購入したんだ！お願いだから返してくれないか！」なにやら必死である。

どうやら、このピカピカ光ってるチケットの持ち主のよう……やばい、睡飛ばして私が持ち主？になったって知ったら、なんて言われるか……でも正直に言わないと。

「あの一、返したいのはやまやまなんですが。さっき、私を登録しちゃったみたいです……よ??」

「っ!!ま、まさか、個別登録できたのか？そんなばかな……イザベラが仮登録していたはず……青ざめたイケメンは呆然としている。」

-----* * * * *様、大変申し上げにくいのですが、
仮登録していたイザベラ様は先日キャンセルされました。その際に
伝言を頼まりました。伝言を再生します。〈あー、* * * * *？わ
たしいー、悪いんだけどおー、今日別の人と結婚することになって
えー、新婚旅行に行くからあーあんと旅行はなしってことであー、
じゃあーさよならー〉* * * * *再生を終わりました。キャンセルに
より人数に空きができ、現在の所有者は* * * * *様と、立花様に
なっております。-----
宙に浮いたチケットから無機質な機械音が残酷な現実を告げた。

「* * * * *」イケメンさん真っ白。

うわー、振られたよこのイケメンさん。さっきから名前が聞き取れ
ないんだけど、* * * * *って？どんな発音なのよ、すごい気にな
る。まあ、でもとりあず慰めたほうがいいのかな？

「あー、大丈夫ですか？」

「* * * * *もう僕はおしまいだ、彼女が最後の望みだったのに。この
まま一生独身なんだ* * * * *」
イケメンさんはシクシク泣きだしてしまった。どうしようこの人* * * * *
* * * * *せっかくイケメンなのに哀れすぎる。

「だ、大丈夫ですよ！何があったか分からないけど、あなたイケメ
ンなんだしすぐ素敵な恋人ができますって！だから泣かないで、ね
っ。」

「* * * * *ぐすっ、君は僕の世界の成り立ちを知らないからそんなこ
とが言えるんだ！僕の世界の女性はごく少なくて存在自体が国宝
級で、女性1人に100人まで夫を持つことが許されてる。それで

も男はうじゃうじゃ余ってるんだ・・当然、交際や結婚・離婚・再婚は女性の気分次第だ。それでも僕は諦めずイザベラに対して交際申し込みをして散々待たされてようやく交際できたのに・・あんまりだ・・」ああ、せつかくのイケメンが涙と鼻水とよだれで顔がすごいことになっている。しかしどんだけ女が少ないのかな、イケメンさんの世界・・・ってこの人異世界人なの？普通に背の高い長髪の日本人にはしか見えない。

「じゃ、じゃあ、このチケットで好みの女性がたくさんいるとこに行きましょうよ！あ、それかここで恋人を探すつてのもいいんじゃないですか？とにかく失恋には新しい恋ですよ！」
必死にフォローフォロー、私こうみえても空気読めるOLですからもう会社のゴッドマザー扱いだけど。

「この世界には女性なんていないじゃないか！いてもすごく少ない！下調べでチケットを1枚使って治安のよいこの世界に来てみたけどがっかりだ！」
きっぱり断言するイケメンさん。

「・・・あのー、私も一応女性なんですが？」
なんかかなりカチンと来たぞ、おい。

「は？キミが「女性」だつて？馬鹿を言うな！「女性」というのは、体重が300キロを超えてさらに胸の豊満な非常にふくよかな方に決まってるだろう！？僕が想いを寄せていたイザベラも400キロ超えの超美人だったんだ・・・」

それはそれはうっとりとした表情を浮かべている。絶句である。

「・・・そ、それって、もしかして、超絶ぽっちゃりで巨乳な人が「女性」という世界なの？そうなの？なんてマニアック！ないわ

「、ないない。300キロ以上つてもはやギネス級だよ・・・」

「でも、チケットで条件絞って見たら案外簡単に見つかりそうだけど。ねえ？ナビさん？」

チケットの検索機能で、彼の好み合う女性がいる異世界を探せばきつと元気もでるはず！！ナイスだ私。

「.....、ひとつだけあります。ですが、あまりおススメできません。現在非常に不安定な時期で、治安も安全とは言えません。」

「あ、でも条件に当てはまるところがあるんだ？じゃあ、行ってみたらどうですか？いい気晴らしになるんじゃないですか？」

これはいいことを閃いた！と満面の笑みでイケメンさんに今話を提案してみた。当然私は行かない。

女の私がなぜ、女だらけの世界に行かなくちゃいけないんだ。そんな趣味は断じてない！

「ぐすつ、ほんとに僕の好みの「女性」がたくさんいるんだろっね？こうなったら美人じゃないと承知しないからな！いるのなら行ってみたい。でも、1人で行くのは心細いから君についてきてもらう。そっいえば、キミもチケットの持ち主だしね」

逃がすものかと手をがっしり掴まれた。くっ、先手を打ってきた・・・。

イケメンさんは少し復活したのか、生き生きとナビさんと打ち合わせを始めた。しかし宙に浮くチケットに向かって独り言をいうイケメン、シニールだわ。

まあ、土日は仕事休みだし、異世界なんてきつと二度と行くことないだろうし、私はのんきに打ち合わせを眺めていた。非現実の嵐に、いまから思えば感覚がマヒしていたとしか思えない……。

「よし、決まった。行先は女性がたくさんいて、なおかつ、僕の好みの女性がいる可能性のある世界だ！」

結局、さきほどナビさんの提案していた世界にいくようだ。あれ？なんか危ないってなかったか？

とたんにチケットが強く光り、その中の一枚が空中に浮かび私たちの周りの空間がゆがみ始めた。

「行くぞ！僕の理想の恋人を探す旅に出発！」

彼は私の手を握り、ゆがんだ空間に私を連れて入った。うっ、ぐにやぐにやして酔いそう……

異世界チケットを拾いました、イケメン付きで。 (後書き)

ざっくりとした書き方しかできない作者です。
描写も拙く申し訳ないです。

誤字・脱字等ありましたらお知らせください。

異世界チケット使用2枚目です。(前書き)

さくつと異世界にいったちやいます。高性能ナビシステムです。

ご都合主義ですので、ご了承ください。

異世界チケット使用2枚目です。

………異世界旅行チケット2枚目使用、残りは9枚………
………

<検索条件：女性の比率が多く、且つ、体重300キロ以上、巨乳であること。ふくよかであること。*****の恋人になれる可能性のある女性がいること。>

ぐにゃぐにょとしたいびつな空間から急に足場のしつかりした場所にでた。

ここが異世界なの？なんか森の広場っぽいところに出てきたみたい。
ん？太陽が三つ？！ドラゴンが飛行訓練のように飛んでる〜うわー、ドラゴンなんて初めて見た！
やばい、ほんとに異世界だ！ビバ！ファンタジー！30才を過ぎてもファンタジー大好きで何が悪い。どんとこい、ファンタジー！開き直って楽しむことにした。だてに会社でゴッド姉さんと呼ばれてないさ。

私が年甲斐もなく喜々としてまわりを見てみると、彼がナビさんと何やら話しこんでる。

ぶかぶか宙に浮いてるチケットと真剣に話す姿はやはり珍妙である。

「どうしたんですか？」

「いや、せつかくたくさん女性のいる世界に来たのにこんな僻地に連れてきたから苦情をだね・・・」

と、彼が出てきた場所についての不満を言っていたのだ。

「・・・お言葉ですが、*****様、この世界は今、非常に危険な時期なんです。ですから、できるだけ人の少ない場所に案内したのです。人の多い場所に出ると立花様まで危険に晒されます。・・・」

「そんなに危ないんですか？この世界？」

森の中ですべて静かだし、時間がなぜか昼だけど、植物や動物も見慣れないものがわさわさもさもさしてるけど別に危険は感じないけど・・・？

「・・・女性は確かにたくさんいらつしゃいますが、今はほんとうに・・・ズドドドドドドドドド！！！！」

ナビさんが言い終わる前に、急に轟音が響いてきた。

地鳴りのような・・・何か土煙を巻き上げながらこっちに向かってきてる？

広場から、その土煙がはつきり見える。なんとというか・・・大きな二足歩行の牛？牛人？

段々、はつきりとその土煙の正体が見えてきた。2〜3メートルはあろうかというゴツイ巨体の女性の群れだった。胸がなければ女性と判別できないたくましさである。顔も牛と人が混ざった何ともいえないお顔立ち。

しかも、「男だー、男の匂いがする！」「男男男男・・・ぐふふふ」「はあはあ、男・・・じゅるり」口々にそういつている。

そして、・・・その牛のような巨体の女性の群れを見たイケメンさんはすっかり青ざめている。当然私も。

.....***様、ここは現在、発情シーズンなんです。普段なら、特に危険はないのどかな世界なのですがこの時期だけは、男性にとって非常に危険です。周りにいる彼女たちは番いになれなかつた余りの方たちですから。男性を見れば・・・問答無用で襲ってきます。.....

うわー、ナビさんの説明を聞いていたら牛のような風貌の女性たちにすっかり囲まれてしまった。目は赤く血走ってるし鼻息も荒い。筋骨隆々の闘牛に囲まれた気分である。

そして彼女たちはお互いをけん制しあっている。隙あらばイケメンさんを襲う気満々である。たしかに300キロはあるよね！軽く1トンくらいありそうだよ！！！！

「イケメンさん、この状況非常にまずいと思うんですがどうします？」

青ざめて固まっているイケメンさんにひそひそ話しかける。

「どどどど、どうしたら・・・こんなにゴツイ女性の世界とは思わなかつたし、いくら条件に合うからと言って恋愛対象には見れないよ・・・」

イケメンさんもひそひそ答える。

「なら、次は私が行きたい異世界にいつていいですか？このままだと襲われますよ。よし、さっさと移動しましょう！ナビさん、次は魔法が使えて治安のいいところをお願いします！大急ぎで！」

- - - 承知しました。すぐにご案内いたします。 - - -
- - -

魔法の使える異世界は需要が多いのか、すぐに移動できるようだ。
チケットが光り出し、私たちはゴツイ女性たちから逃げ出した。彼女たちはお互いけん制し合っていたため、この成り行きにすぐ対応できなかったようだ。牛だからかな？ にはともあれ、次は魔法の異世界へゴー！ ぐにやぐにやした空間にさっと入り、移動を開始。

しかし、初異世界が牛人の世界とは・・・番いになれなかった女性ってほとんど闘牛だったし、怖かった。やっぱりこっちの世界の男性陣も怖いから逃げたんだろうなあ。
しかし、滞在時間・・・わずか5分たらず。

異世界を実感できたのは、太陽が三つ。ドラゴンの航空ショーもどき？。そして、筋骨隆々の牛人女性多数。

なんともトホホな初異世界でした。次に期待だー！

異世界チケット使用2枚目です。（後書き）

こんな感じで、無駄に旅行チケットを使う二人です。
11枚つづりで、すでに二枚使用。

ご利用は計画的に、の見本ですね（笑）

異世界チケット使用3枚目です。(前書き)

魔法の世界に着きました。すこし休憩するようです。闘牛女性に激しく動揺した模様。自分の頭の中のイメージは、ムキムキマツチヨで牛のコスプレ風味。

主人公とイケメン、意外にいいコンビ？恋愛フラグは・・・立つか微妙。彼があの特徴嗜好だけに。

異世界チケット使用3枚目です。

：：：：：：：異世界旅行チケット3枚目使用、残り8枚：：：：：：：

<検索条件：だれでも魔法が使える、治安のよい異世界。>

ぐにゃーんとした空間から、二人で慌てて飛び出し思わずまわりに牛女性がいないか確認してしまった。あれは確実にトラウマになるレベル！！・・・イケメンさんもまだ顔色が優れないし。

しかし、この移動のぐにゃーとしたこんにゃくのなりそこないみたいな空間はなんとかならないのか。

時空を移動する際に体を守るためってナビさんに言われたら文句はいえないけど。

想像してほしい。こんにゃく作るのに失敗した灰色ゼリーゲルに全身ふんわりやさしく包まれるところを！！！！

呼吸とかはできるけど、気分はよくない・・・これがあと何回続くのかと思うとうんざり。

さて、気を取り直してこの異世界はどんなかなーとキョロキョロしてふとイケメンさんをみたらなぜか青いチャイナ服もどきを着ている。

男性用とかではなくなんか女性用っぽい？スリットも深〜い、あらセクシー・・・って、まさか私もチャイナ服なの？自分の服装を確認したら、やはりチャイナ服もどき・・・しかも蛍光ピンクつてどんな嫌がらせ？30過ぎのOLにチャイナ服つてどんな罰ゲー

ムよ・・・

「・・・ナビさん、この異世界の説明をしてもらえますか？」
とりあえず現状の把握をしなくては。

「・・・この異世界は、治安もよく・・・比較的安全な世界です。男女比率も5：5と平常です。魔法は本人の想像力に左右されます、この世界での魔法はいかに自分たちの世界を便利にするか？それだけで価値が決まります。なお、この世界の服装は国民服の着用が義務付けられています。勝手に脱ぐと罰せられますのでくれぐれもご注意ください。細かい注意事項はその都度お知らせします。」

ふむふむ、魔力が高い低いとかではなく想像力さえあれば魔法は使えるんだ。生活に便利な魔法が使えたらそれだけ重宝されると・・・そして、チャイナ服が国民服・・・脱ぐと懲罰行為なのね・・・

しかし、安全第一のナビさんは現地の人といきなり接触しないように、わざと郊外もしくは僻地に連れてくるようで・・・当然今も郊外。牧草地帯みたいなのどかな場所にいる私たち。とりあえずいきなり闘牛女性がくることはなさそうでした。気候も穏やかで気持ちいい風が吹いている。

「さっきの牛人異世界で体力・精神力を根こそぎ奪われて、今は動きたくないんですけど・・・とりあえず休憩がてら自己紹介でもしませんか？」そこらへんの地面に適当に座りながら話しかける。

「そういえばまだ名乗っていなかったね。それとさっきから取り乱してすまなかった。一気にいろんなことがありすぎて少々混乱してしまっただよ。僕の名前は、ンチャック・ツハイダーだ。長寿な世界

の住人でね、100歳を過ぎたあたりから面倒で・・・もう自分が何歳なのか忘れてしまったよ。キミよりは遥かに年上なのは間違いないけどね。」

「長寿すぎて自分の年齢も忘れるって、どんだけ長生きできる世界なんですか・・・。それにさつき失恋した割にはずいぶん元気なよくな気もしますよ?」

恋人に邪険にされ鼻水たらして泣いていたとは思えないほどすすきりした顔になってるし。

「ああ、まあ・・・なんというか・・・イザベラに振り回されるのは今に始まったことじゃないし、今回の件でもう彼女のことは諦めようと思ったんだ。それに僕の世界では、女性と結婚して幸せを得ることができるなんてほんの一握りしかないんだ。そもそも女性の数が圧倒的に少ないからね。」

「ふーん、なんだかせっかく寿命が長い世界なものにもったいない話ですね。でも、なんでそんなに女性が少ないんですか?少子化にしては偏ってますよね?」

「詳しくは僕も知らないんだ。ただ、新しく女性が生まれることはもうないだろうって話だ。だから、巨体でもなんでも健康で生きている女性に男性達が殺到して・・・。もともとすごく長寿の世界だから、繁殖能力が極端に低いし。僕の世界はゆっくりゆっくり崩壊してるんだよ。わかるだろう?新しく子供が生まれない世界がいずれどうなるかなんて。僕みたいに異世界に飛び出すのは珍しくないんだよ。そして行ったらみんな帰って来ないんだ。旅行のチケットは帰還用に一枚サービスでついているのに、だよ。僕も多分、この旅行で恋人が見つかるかそれなりに暮らせそうなところが見つかったら、そこに移住しようと思う。もうあのじわじわと崩れていく故郷には・

・正直、戻りたくないんだ。その時はこのチケットはキミに譲るから。ナビさん、今の譲渡宣言を記録しておいてくれ。」

キャンペーンで一枚サービスって書いてあったのは帰還用だったのか・・・

かしこまりました、*****様に合う異世界があった場合、全てのチケットの権利を立花様に譲渡する。記録致しました。-----

「なんだか、しみりしちやいましたね。じゃあ、私の自己紹介しますね！立花杏子、35歳、仕事は小さな会社の事務員してます。女らしくない性格のせいでまだ独身です。おせっかいで困ってる人を見ると放っておけないです。趣味は読書で好きなジャンルはファンタジー！だから、今のこの状況ですごく楽しいです。怖さもあるけど、一人じゃないしこの際だからいろんな異世界に行ってみたいです！」

むふーむふーと、鼻息を荒くしながら私が言いきるとイケメンさんが爆笑した。

「なるほど、キミにとっては随分異常事態なはずなのにどうしてほいほいついてくるかと思ったら・・・キミはこの事態を楽しむつもりなんだね？なかなか豪胆じゃないか！！気にいったよ！チケットはまだあるし異世界旅行を楽しもう。長生きしてる僕でもさすがに異世界は不慣れでね、恋人探しのこともあるし相棒がいると心強いよ。それと、この旅行にかかる費用とかは一切心配なくていい。無理やり連れてきてしまったからね。キミのことは、杏子さんと呼んでいいかい？僕のことは、ンチャックでいい。」

二人できれいな空を見上げながら笑い合った。

なんだ、意外にいい感じの人じゃん。私の心の中で、「泣き虫鼻垂れへたれイケメン」から少しだけイメージアップしておいてあげた。そっと横に座る彼を観察してみた。

長生きしてるって割には20代後半にしかみえない外見。腰まであるさらさらつやつやの黒髪。着てる服はチャイナ服もどきだけど。ぷぷつ。顔も嫌みなくすつきりと整ってる。多分、地球でも普通に美女にモテるんじゃないかなあ？彼のマニアックな女性の好みさえなければ・・・ね。

彼の恋人探しは難航するだろうと思うと、少し不憫になってきた。

この魔法の異世界を堪能したら次は彼の希望するところにしてあげよう！！

35歳過ぎて恋人もおらず親にも最近では呆れられ、現実にも夢も希望もなかった私だけ・・・

この異常事態、ぜひとも満喫したい！！

体力・気力が回復したら人のいる町に出発進行

異世界チケット使用3枚目です。(後書き)

やっとイケメンの名前、出せました。イケメンさんの世界、結構大変。

次は魔法の街に行きます。果たして、どうなることやら……

異世界チケット使用3枚目です。その2（前書き）

やっと、町に着きます。

ここで驚愕の事実発覚。

魔法の使用は計画的に。

最初から読み返して、脱字を発見して、きのうこっそり訂正しました。

いやお恥ずかしい。

もし、誤字・脱字ありましたらご連絡ください。

異世界チケット使用3枚目です。その2

さてさて、自己紹介やお互いの世界の話などをしてたら結構時間が経っていた。少し日が落ちてきた。異世界でも夕暮れは同じなんだなあ。ここは太陽も一つで、自然環境自体はあまり変わらないのかな？まあ、空気が硫酸ですから絶対に息しないでとかいう世界だと着いた途端死亡だし。普通が一番なのかもね。でも、やっぱり魔法が使えるとこに来れたんだし自分の長年の願いも叶いそうなのこの世界を堪能したい！

そろそろ、異世界観光といきたい。

なにしろ最初があまりに衝撃的な世界だったから…闘牛女って…でも発情期じゃなければ、きっと楽しめたんだろうなあ…ナビさんも普段は穏やかかっていったし。

ドラゴンとかもじっくり見たかった。

そう思うと少し残念ではある。

「そろそろ、町に行ってみませんか？ンチャックさん。」

日も暮れてきて少し肌寒くなってきた。このままだと野宿コース？それは避けたい。知りあって半日も経過してない男性と野宿する趣味はない。

「ああ、そうだね、今日はもうどこかで宿を取った方がいいようだ。しかし、本当に何も無いな…町までどれくらい距離があるやら…ナビさん、ここから最寄りの街はどれくらいの距離か教えてほしいのだが？」

……了解しました。今、この世界の地図の細かい把握を
作動させています。……町がありました。ここから約10キロ南
に下ったところに大きな町があります。現在、魔法のフェスティバ
ルのようなものが催されており、かなりの人が集まっています。宿
をとるのであれば急いだ方がいいと思われれます。……

「了解。じゃあ、空を飛んでいけば早く着くね。僕のペットを呼ば
う。出ておいでピーちゃん！」

イケメンさんがピーちゃん！と呼ぶと、空が急に陰った。恐る恐る
上を見たら、八枚の羽が生えた双頭の馬？が優雅に舞い降りてきた。
真っ白な体軀はとてもしなやかで美しく、サラブレッドも蹄鉄を外
して逃げそうなくらい神々しい。……これがピーちゃんですか。名
づけのセンスが……女性の好みのそうだけどころいる残念なイケメン
だなこの人は。

「これが僕のペットのピーちゃんだ。ちょっと痩せすぎてかわいく
ないが……これ以上太ると空を飛べないからね。これだと町まで1
0キロあっても数分で町に着くよ。存在を認識できないように意識
障害のバリアを自動的にできるから重宝するんだよ、この種族は。
昔、乱獲にあつたせいで自己防御能力が独自に進化したんだ。」
イケメンさんは誇らしげにピーちゃんの説明をするが、痩せすぎて
かわいくないといった時のピーちゃんの表情は「だめだ、こいつ……」
と憐憫の表情だった。ペットにも主人の好みは馬鹿にされてますよ
！。

「さ、遠慮せずに乗りましたまえ。ああ、背が足りないか……よっ、と」
イケメンさんは私をひよいと肩に荷物抱きしていっしょにピーちゃ
んの背中に乗った。意外に遅しい！びっくりした。

「ピーちゃん、町の方角はここから南にだいたい10キロだそうだし、いきなり町に飛来したら騒動になるから少し手前で下ろしてくれ。頼んだよ。じゃあ、出発!!」

私とイケメンさんに乗せたピーちゃんは、軽く嘶きふわっと空に舞った。

南に方向を定め、ふんふんと臭いを嗅いで……ミサイルのごとく飛び立った。まさにロケットスタート！
は、速すぎる。息！息ができないから！

数分後、無事に町がよく見えるあたりでピーちゃんに下してもらった。や、やっと呼吸ができる。もう若くない体には堪える移動方法だわ。

「よし、町までは歩こうか。宿が取れるといいんだけど……」

「はい。楽しみですね、どんなお祭りなんだろう？」

結構な人が町に向かっていているみたい。もちろん、老若男女もれなくチャイナ服だけだね！色とりどりで目がチカチカする。国からの色の指定は原色のみなのか、非常に目に厳しい。でも、なんか男女関係なく髪の毛の薄い人が多いような気がする。普通の人間に見えるけど、薄毛の種族なのかな？

町にはなんの問題もなく入れた。

とても素敵なオリエンタルな雰囲気町だった。うん、いい町。

文化はそれなりに発展してそう。屋台もたくさん出てるし、いろいろ見てみたい！

「んー、この人の多さでは先に宿を確保した方がよさそうだね。こんなに人が集まるとは、よほど人気のフェスティバルなんだろう。」
大きなメインストリートを歩きながら二人で宿を探す。

しかし、やはり祭りのせいでどこも満員だった。二人で途方にくれていると、さつき満員だからと断られた宿の従業員が声をかけてきた。

「さきほどキャンセルがたので、ツインでよければひと部屋空きが出ましたが？どうされますか？」

「お願いします！」「うわ、ハモった。とにかくこれで宿の確保ができた。この際同室でも構わない。彼の女性の好みからして私が襲われることはないと思う。

手続きはイケメンさんに任せて、さつそく二人でフェスティバル広場に向かう。屋台も出ているいろいろ冷やかしながら歩いていると、それまで無言だったナビさんが突然衝撃的な事実を語った。

「-----大変申し訳ないのですが、この世界は見学だけにしておいた方がよいです。さきほどの移動は急いでましたので移動を最優先させてしまい、詳しく調べる時間がありませんでした。よく調べた結果、魔法は想像力があれば不可能はない世界であるのは間違いないありません。ただし、便利な魔法を行使すればするほど、代価を自身の髪の毛で払わねばいけない世界のようです。ここの人々の髪の毛が薄い人が多いのもそれが原因です。行使した魔法のレベルで抜ける差はあるようです。治安がよいというよりは犯罪を起こすことができない魔法が統治者によりかけられています。この世界では魔法を使うと相応のリスクがあるとご理解ください。-----

え、なにそれ？魔法を使うと毛が抜けるって、なんてハイリスク・ハイリターン！それでみんな髪の毛薄かったんだ…

魔法を使うときの詠唱とか覚えられないし、面倒くさいから簡単に魔法が使える異世界に行きたかったのに、現実には厳しいなあ。

「さすがに魔法を使って、薄毛にはなりたくないです。おとなしくフェスティバルだけでも楽しめましょう…」

ものすご〜くテンションが下がってしまった。とぼとぼ歩く。

「僕も長年生きてるけど、こんな世界の話は初めてだよ。杏子さんの選ぶ世界も僕と同じでとんでもないね。」にやにやと鬪牛女世界の意趣返しをしてくる。くそ〜、言い返せない。

『それでは、ただいまより、統治者さま主催によるく生活に便利な魔法コンテストを開催します。エントリーされた方は舞台上がってください。』

司会役の髪の毛が比較的ふさふさなおじさんが叫んでいる。

広場に設置されたそれほど大きくない舞台にパラパラとエントリーした人が上がっている。みんな、眩しいほど薄い。薄いということ、魔法をたくさん使ったということだよ。

正直、エントリーした人たちの魔法は私からすると微妙だった。町の人たちの生活がほんの少しだけ便利になる新規の魔法や魔法生活用品の発表だった。

例えば、洗濯物を干すとき、届かない分だけ少〜し丈が伸びるサンダル（男女兼用）

あるいは、牧場に放した家畜が少〜しだけ早く集まる笛。
新しい魔法は、声を少〜し遠くまで響かせる拡声魔法。

うん、なんか別に必要ない気がする。すぐく地味。

でも、それを見ている人たちからは「おお〜」「さすがだ」「すばらしい」など絶賛されている。

魔法に対する価値観が違うみたい。私が本やラノベなどで知る魔法とは全く違う。生活に役立てば評価されるっていつてたのは本当なんだ…。後から出た人も似たような魔法や魔法生活用品だった。ひたすら地味で堅実なものだった。

『それでは、コンテストの最後に我が統治者さまの魔法をご覧くださいー！』司会者が大声を張り上げた。

急に広場がざわつき始めた。みんなキラキラした表情で上を見上げている。

何か始まるのかな？

ヒュッヒュッ、ドドーン!!!

空に何か打ちあがった。花火？すっかり暗くなった空を明るくしながら、色とりどりの花とお菓子が降ってきた。

これはすごい！こんな魔法を使う人がいたんだ。すごくきれい…うっとり空を眺めていた。その横で、イケメンさんが落ちてきたお菓子を拾い集めている。

周りの人も、花とお菓子を拾ってる。え？これって拾わないとダメなの。じゃあ、見たことない花だけでも拾うとしますか。お菓子は食べられるか分からないし。あれだけあった花とお菓子は町の人にすべて拾われた。拾い終わる頃には、明るさが消え元通り暗くなった。

『本日は生活に便利な魔法コンテストに参加いただきありがとうございますございました。明日までコンテストは続きますので、エントリーした方は舞台横の本部までお越しください。今回は参加人数が少ない

のでまだまだ受付しております。奮って参加されてください!」

すっかり夜になってしまった。

最後の魔法、きれいだったなあ。私も使ってみたいけど、抜け毛は嫌だ。ものすごくジレンマを感じる。

「今日はもう終わりみたいです、おなか空いたので宿に戻りましょう?」

「もぐつ、ああ、そうだね。戻って夕食を取ろうか。ここのお菓子、おいしいよ。初めて食べるけど、口にまとわりついて離れないんだ。一瞬息が止まりかけたよ。コツは掴んだからもう大丈夫だね。」
「はっはっは、と口をモグモグさせながら恐ろしいことを平気で言う。優男な外見とは裏腹に、野生的なところもあるんだなと、またひとつイケメンさんについて学んだ。

よし、旅行中の毒味は任せよう。

「ンチャックさん、宿に戻ったら少しだけ魔法を試してみたいです。要は生活に便利じゃない魔法なら、毛は抜けないんじゃないかなと思っんですよ!せっかく魔法が使える世界に来たのにもつたいなくて、諦めきれないです。」

口をモグモグさせるイケメンさんと宿に戻ってきた。

宿の食事は、花カレーだった。あとはパンに花のサラダ。

花を食べるのにはびっくりしたけど、シャキシャキして食感はレタスだった。普通においしかった。

花は、野菜扱いで逆に野菜が花のような扱いだった。さっき空に撒

いた花は、町の人には食べ物だったから必死に回収してたのか、なるほど納得。

やっぱり価値観が謎だなあ。さすが異世界。

泊まる部屋に入るとベッドが二つあるだけのシンプルな部屋だった。どこのビジネスホテルだよ…

お風呂とかもなさそうだし、ほんとに寝るだけの宿なのね。二人で別々のベッドに腰掛ける。イケメンさんはまだお菓子をもぐもぐしてる。よく食べる人だ。

「さて、どんな魔法にしようかなー。あ、今日お風呂入ってなかったから、臭いとか気になる」

それなら、臭い消しスプレーとか出しちゃう？ 小さなやつをイメージして…臭いは石鹸がいいかな。

うーん、と頭の中で小さな消臭スプレーをイメージして…手のひらに乗るのを想像。

一瞬チカツと光り、ふわっと自分の手の中にいつも使う携帯消臭スプレーが出てきた。シュツと自分にふきかける、いい香り。

「やった！できた！魔法、できましたよ、ンチャックさん！」ひやつぽーとベッドの上をごろごろ転がる。

そう、ご飯を食べて満腹になりすっかり忘れていたが、便利な魔法を使うと…

「あー、杏子さん。後ろ頭にハゲができていますよ。小さいからそこまで目立たないけど、毛が抜けてる。便利な魔法を使ってどうするんだい。ドジだね、キミは。」

「え？え？」慌てて後頭部を触ると…一部毛がつるんと抜けていた。消臭スプレーひとつ出すだけで、これですか…調子に乗ってほしい魔法を使えば、恐ろしいことに。

「ナビさん、質問です。毛が抜けきってしまったらもう魔法は使えないんですか？」

「……よくわかりませんが、ここの常識からいけばそうなります。魔法が使えなくても生活できますし、毛が抜け切った人に対してある意味＜勇者＞のような扱いをされます。それだけ町の発展に貢献したということですから。ここの統治者の方も髪の毛は残りわずかと聞いております。あれだけの規模の魔法を定期的に行っているから当然ですが、おそらくご自身最後のフェスティバルで後継者を探しているのではないのでしょうか。明日の優勝者が次の後継者になるはずです。町の人には伏せられていますか……」

「はー、なんだか切ない話ね。魔法に頼らずに生活すればいいのに。なかなかうまくいかない世界なのね、ンチャックさん、明日はどうしますか？祭りは夜だし、もう別の世界に行きますか？今度はンチャックさんの好きな世界でいいですよ。ただし女性の体重は150キロ以下にしてください、また闘牛女には困まれませんから」

お菓子をモグモグさせながら、ムツと眉をひそめた彼はこう言った。

「明日の最後の祭を見てから移動しよう。こういった祭に遭遇するのはラッキーなことだからね。それに時間や日にちを気にすることはないよ。僕たちがチケットを使用してる間、お互いの世界では時間はゆっくりとしか進まない。チケット全部使っても1〜2日もかからない。だから楽しまないと損だよ？」

チケツトは時間すら自在に扱うようでした。さすが万能ナビシステム。

チケツト全部使うまで、異世界旅行が楽しめると聞き嬉しくなり、髪の毛が抜けたこともすっかり忘れ、いつのまにか寝てしまっていた。

「…それで明日はピーちゃんに乗って、夜までこの世界を散策しないか？…あれ？もう寝たのかい。まったく地球じゃ妙齢な年齢のはずなのに、はしゃぎすぎたんだね。イザベラの我が儘にはウンザリさせられたけど、彼女はどうにも憎めないし放っておけないなあ。やれやれ。」

私が寝た後、寒くないようにフワフワの毛布を魔法で出してかけてくれたのだと、翌朝、彼の後頭部に10円ハゲを見つけて思わず感激したのは内緒だ。

異世界チケット使用3枚目です。その2（後書き）

二人はすでに兄・妹な雰囲気です。すっかり意気投合しています。

もう一日滞在して、次はイケメンさんの行きたい世界に行く予定です。

ちなみに、薄毛の方に悪意があるわけではありません。自分も薄いです（泣）

あくまで話の上です。ご了承ください。

異世界チケット使用3枚目です。その3(前書き)

二人仲良く後頭部に ハゲできました。おそろし

この魔法の世界はこの話で終わります。

魔法の使用はほどほどに。

異世界チケット使用3枚目です。その3

翌日、ふたりして後頭部に小さなハゲを作ったことに笑いあい、やはり魔法は使わない方がよさそうだと意見が一致した。隠せる程度でよかった。

宿で、朝食を頂き夕方まで町のまわりを散策しようと町を離れた。そして誰もいないのを確認して、ピーちゃんの背中に乗って散策に出発した。

今度はゆっくりね！

町の周囲を巡回してわかったのは、この辺りで人が住んでいるのはあの町だけだということ。

あとはぼつりぼつりと小さな集落があるだけだ。

ひたすら草原だけが広がっていた。

田舎とかそういうレベルでなく、この世界自体人口が極端に少ないみたい。

だから魔法に頼るしかなかったのかも、髪を犠牲にしても、それならカツラがあればいいのに…と薄い髪の人達を不憫に強く思ったのがいけなかったのか

チカツ、と魔法が発動して空を巡回していた私たちのさらに上から、大量のカツラが降ってきた！怖い、怖すぎる。

町から離れたところでよかった。そして私の髪の毛は、抜けずになぜか色が薄くなりました。黒髪から茶髪に。次は白髪？でも抜けなくてよかったです…

慌てて下に降りて、カツラを回収。イケメンさんと話し合い、今日の祭りを見たらこの世界から移動するし、これを全部町の人に寄付しよう、と。

「仕方ない、これを入れられる大きな袋！」イケメンさんが魔法を使った。あ、後頭部の抜け毛が広がった！10円サイズが500円サイズに…ごめんなさい。

地面に落ちたカツラをきれいにして、袋に入れたりしていたらあつという間に夕方になってしまった。

急いでピーちゃんに飛び乗り、町に戻る。よかった、間に合ったみたい。

宿にはもう泊まらないので、支払いを済ませて広場に向かう。

イケメンさんはサンタさんのように大きな袋を肩に抱えているので、目立つこと目立つこと。

そして、私に広場の隅にいるように告げて大会本部にカツラを持って行ってしまった。

『さあ、本日はく生活に便利な魔法コンテスト>最終日となります。本日は参加者がいないかと思われましたが、<旅行者>(ツーリスト)の方が急ぎよ参加されます。これはすごい発明です！ではどうぞ！』

どよどよと広場が騒がしくなる。

ひょいっとイケメンさんが舞台上上がり、そいやっと袋の中身をぶちまいた。

「このカツラがあれば、抜け毛も薄毛も気にしなくていい！好きに使ってくれたまえ！」

大量のカツラが広場に飛び交う。広場のほとんどの人が、きよとんとしたが一斉にカツラの意味を理解し舞台上に殺到した。さながらバーゲンセール会場だ。やつぱりみんな薄毛を気にしてたんだ…特に女の人が興奮マックスだわ！

「ほら、いくぞ、走って！！」

いつのまにか私の隣にきていたイケメンさんが私の手を取り、町の外に向かって走り始めた。

広場に殺到する人ごみを避けながら、町の外へひたすら走る。「だけれか、彼を捕まえてくれ！次の統治者に…！！」とても眩しい頭の方が何やら叫んでいるようだった。しかし、カツラに群がる群衆に阻まれて動けないようだ。

「ナビさん、移動準備を頼む。移動ポイントは町の外へ出てすぐだ。次の世界の条件は、体がすごく大きいのが普通で、男女平等に存在する世界。体重制限はしない。治安はそれなりでいい。彼女は僕が守るから。急いで検索頼む！」

……かしこまりました。検索します…、条件に当てはまる世界を発見、急いで繋ぎます……

町の外に向かって走る私たちを何人か追ってきた。

「待つてください！ぜひ、町の統治者に！こんなに大量に魔法が使えるなんて他にいない！」

「カツラをもっと！」

「ついでにカツラ以外も！」

なんかずうずしい願いもあるけど、魔法使ったびに髪の毛が減る世界なんてまっぴらよ！

「ごめんなさい、お断りします！」走りながら答える。

追いかけてこは町の外まで続く。し、しんどい…

そして、こんにやくのなりそこないのようなくにやくにやした移動ゲートを見つけ二人で飛び込んだ。

なんで、最後はこうなるの？！ゼリーに包まれながら、イケメンさんが選んだ世界がまともでありますように…と祈るばかりだった。

異世界チケット使用3枚目です。その3（後書き）

魔法は使えるけど、代償も大きい世界でした。

この後、「カツラ」が流行し、髪の毛を気にせず魔法を使えることになりこの町は大きく発展します。杏子の見本があるので、次のカツラはその世界に適したモノになるでしょう。杏子が出したカツラはかなりファンタジックでした（笑）

チャイナ服、統治者の好みだけでした。町の人には意外に好評。

次は、体重制限のない、体が大きい人が闊歩する世界にいきます。

異世界チケット使用4枚目です。その1（前書き）

次は、イケメンさんの恋人探しのための世界に行きます。

世界の探索の前に少し休憩を挟みます。

霧に囲まれたところに放り出されました。ここは治安はそれなりですよ…

異世界チケット使用4枚目です。その1

異世界チケット4枚目使用

< 検索条件：体が大きいのが普通、男女平等に存在。体重制限なし。治安はそれなり >

移動用のぐにやぐにや空間から出てきた私たち。

は、全力疾走なんて学生時代以来だわ、息を整えながらとにかくぺたんと座り込む。まわりを確認する力が出ず、さっきの追いかけてこの理由を聞いたです。

「もうっ、なんで舞台上がってカツラをばら撒いたんですか？普通に寄附すればよかったのに！」

「いや、最初は気前よく寄附して祭を見て次の世界に行くつもりだったさ。ただ袋の中身を確認した人が統治者を呼びに行ってね。そこから次の統治者になってほしい！とか言われて困ったんだよ。そこで舞台上にエントリーした者として上がり、カツラをばら撒いた隙にこっそり逃げようかと…そしたら、あんな騒ぎになってしまった。まさか追いかけてくるとまでは僕も思わなかったよ…。」珍しくグツタリしてるイケメンさん。

なるほど、あれだけ大量のカツラを見て後継者について思っちゃったのね…ってそれって私が魔法で出したカツラだから、もし捕まったら私が後継者だった?!…危なかったあ。

次の異世界に無事に来れて本当によかった…しかし霧がすぐくて隣にいるイケメンさんしか見えない。よく見えて1メートル先まで。真っ白。

「で、ナビさん。僕が選んだ世界はどんなところかな？ここに着いた時から感じていたけど、空気が少し薄いんだが。霧もすごいし」

「……霧のせいでうまくシステムが作動しないようです。この世界の詳しい内容が不明瞭です。原因を調べてますのでお待ちください。それとここは少し標高の高い山の頂上付近です。郊外で安全な場所がここしかありませんでした。近くに山小屋がありますから、まずはそこで休まれてください。現在は狩猟シーズンではないため山小屋には誰も近寄りません。下山すれば麓に村があります。そこに検索条件に当てはまる女性がいるかと思われます。……」

「んー、とにかく霧が晴れないことには動けないか…。とにかく山小屋を探そう。」

手探りで付近を探すと小さな山小屋があった。カギなどもなく避難場所も兼ねてるみたい。

中に入ると小さな暖炉があり、簡易二段ベッドもあった。霧が晴れないと最悪ここで泊りかなあ？

テーブルと椅子もいくつかあったので、埃を掃って座る。しかし小さいなテーブルと椅子。小学校サイズくらい？なんかあまりいい予感がしない…

このへたれ泣き虫イケメンさんと、強引に異世界旅行するはめになった彼の恋人探して…気になることがいくつかあった。霧が晴れる

まで暇だし、この際全部聞いてみよう。

「あの…、いくつか聞きたいことがあるんですけど…質問に答えてもらえますか？」

「ん？別に構わないが、どんなことを聞きたいのかい？」

長身なイケメンさんに、小学校サイズな椅子は辛いらしくずっと立って外を見ている。

「まずひとつ目は、どうして超太めな女性にこだわるんですか？見た目だけでなく、性格も重要だと思いますよ？仮に見た目が叶っても、我が儘な性格や傲慢で高飛車なだったら恋人や伴侶とするにはオススメできません。」

35歳独身女にだって彼氏がいた時はあつたのだ。そして人は外見より内面が大切だとしみじみと実感した。男運が無いとも言っけど。「そうだねえ…改めて聞かれると返事に困るな。何しろ生まれてからイザベラや、僕の世界で生きてる女性たちはすべてにおいて美しい！と教育されてきたから…どんなに巨体でも理不尽で我が儘で傲慢でも、それを許す度量の大きさが男らしさだと…だからこだわるというより頭に刷り込まれてるのかもしれないね」

「なんですかそれ！世界ぐるみで洗脳じゃないですか！ンチャックさんの世界の男性たちが不憫過ぎます…」
「なんか泣けてきた。」

「杏子さんが泣くことはないよ。本当にキミは優しいね、ありがとう。確かに女性を神聖化し過ぎるって女性優遇反対派もいるにはいるけどね。圧倒的に女性優遇派が反対派を上回るから。イザベラに振り向いてほしくて、どんな無茶苦茶な要求もこなしたよ。最後は

お姫様だつこできたなら一緒に異世界旅行に行つてくれる約束だったんだ。だから僕は体を鍛えに鍛えて400キロのイザベラを見事にだっこしたさ！なのに気まぐれで約束は破られた…あの時みつともなく泣いてしまったのは、長年知らず知らず溜まった鬱憤が吹き出したんだろうね…」

泣きそうな表情でグツと堪えているイケメンさん。

「…みつともなくなんてないです！悪いのはイザベラで、ンチャックさんは少しも悪くない！」

あまりに報われないイケメンさんに抱き着いて号泣してしまった。彼は優しく頭を撫でてくれている。こんなに一途な（洗脳された一途さ）イケメンさんを翻弄したイザベラに憎悪と嫌悪感がさらに増した。

許すまじイザベラ！とその他の女達！

「あ、もうひとつ聞きたいことがありました。ンチャックさんって長命種族じゃないですか。恋人になる人が長命じゃなかったらどうするんですか？というか検索条件に同じくらい長命つてのも入れた方がよかつたんじゃない？」

と言った途端、ピシッと固まってしまった。

「…あ」

「あ？」

「すっぱりそのことが抜けていた！！なんてことだ…」

イケメンさんは私から離れ、ヨロヨロとへたりこんでしまった。

やっぱり…だいぶ残念なイケメンだった。普通最初に条件に加えな

きや…

…お話の途中申し訳ありません。緊急事態です。武器を持た何者かが山小屋に向かつてきています。この霧のせいでまわりの状況が把握できません。十分ご注意ください…

えっ、武器持ってるの？！

来て早々いきなりピンチ？

二人で小屋の隅に移動して息を潜める。

「狩猟シーズンじゃないのに武器を持っているとは何かありそうだな…杏子さんは僕の後ろに隠れて…」

イケメンさんの後ろで、身を小さくしバクバクする心臓を落ち着かせようとしたその時…

バンツと山小屋の扉が開いた。

異世界チケット使用4枚目です。その1（後書き）

まだまだ続きます。

節電対策で暖房切って執筆したら、指が動かなく…室温…10
?!

寒いはずだわ……

異世界チケット使用4枚目です。その2(前書き)

続きです。

扉は静かに開けましょう。壊れます。

異世界チケット使用4枚目です。その2

扉を豪快に開けて入って来たのは、身長が私よりはるかに低い小人族のゴツイおじさんだった。なんとというかとにかく横に大きい。おなが扉に突っ返そつだ。すごい体型だ。リンゴみたい。

「あ？なんだあ？先客がいんのかあ…また、デカイやつだなあ。ああ、…<旅行者>か。おい、ちよつとテーブル借りるぜ。」

どつこいせ、と彼は仕留めた獲物らしき不思議な動物をテーブルにドサツと乗せた。猪の体なのに耳がウサギミみたいにでると長い。この異世界旅行で、ピーちゃん以外のファンタジー生物を初めて見た！

「おい、兄ちゃん、悪いがコイツ捌くのちいと手伝つてくれや。少しなら肉分けてやるぜえ。」

ゲツゲツと不思議な笑い方をする小人族のおじさん。ナビさんが注意した武器は、狩猟用の弓や捌く鉞なただったみたいだ。よかつたあ。安心したよ。

「ああ、手伝おう。どうしたらいいか教えてくれないか？」

「ここを切り落とすから、頭を抑えといってくれりゃいい」

ウサギと猪を足した不思議な生き物を、慣れた手つきでザクザク捌くおじさん。そして見る見る真つ青になるイケメンさん。プルプルして今にも倒れそつだ。もしかして、血がダメとか…

「ありや、兄ちゃん、真つ青じゃねえか！おい、そつちの嬢ちゃん

手伝ってくれ。」

「はい！」

プルプル震えるイケメンさんをどけて、私がおじさんを手伝う。たいていの料理は花嫁修業でやったからね、もう無駄になりそうだけど。

肉は小分けするみたいで、ある程度捌くと骨と皮だけになった。鉈の切れ味すごい！

「よし、だいたいこれくらいでいいだろ。嬢ちゃんすまねえな！助かったわ。あとで旨い肉食わしてやつから、外の水場で手を洗ってきな。そろそろ霧も晴れる頃だ。そこで目を回してる兄ちゃんもな！」

ゲツゲツと笑いながら暖炉にマキを焼べはじめた。

私は、真っ青になってるイケメンさんを促し二人で山小屋の外に出た。

確かに霧は晴れてるけど、空は晴れていない。スモッグのようなものが覆っていてはつきり太陽が確認できない。

「ふう〜、またみつともない所を見せてしまったね…血はどうしても苦手で…」

真っ青なまま綺麗な水でばしゃばしゃと顔を洗う。私も血まみれになった手を洗う。ついでに飲んじゃえ。ふー、おいしい。

「気にしないでください。血が得意って人はあまりいないと思いますよ。」

「おい、おめえら！肉が焼けたぞ！早く入って来い。焼きたては旨

いぞ〜」

扉からヒョイツと顔を出しておじさんが私たちを呼んだ。

そういえば、旅行できちんとご飯食べれたのって、魔法の世界だけだ！

お肉、お肉〜と私はウキウキしながら、イケメンさんは真っ青なままヨロヨロと山小屋へと戻った。

「ほら、遠慮しねえで食べ。」

さつき小分けした肉に串を刺して、こんがり焼いてくれたようだ。ふむ、見た目は豚肉っぽい。

「ありがとうございます、いただきます！」はむっと肉にかぶりつく。お、美味しい〜ほぼ豚肉に近い味に感動し、ガツガツ食べはじめた私に満足げなおじさん。

「兄ちゃんは食わねえのか？」

イケメンさんにも串を差し出したが、彼は肉を受け取らない。

「すみません、お肉は好きですがさつきの捌くシーンを思い出すので…ウツ」

ドタドタつと山小屋の外に行ってしまった。あちゃー、また新しいトラウマを作ったかなあ。

「いらなら私が食べますね。勿体ない！」

おじさんからイケメンさんの分の肉をもらう。ハグハグハグハグ…

「ゲツゲツゲ、いい食べっぷりだ！気に入ったぜ、嬢ちゃん！」

「嬢ちゃんじゃなくて、杏子あんじです、おじさん。おじさんの名前はなんていうんですか？」

「俺は、小人族のゲンジってんだ。いつもなら霧が濃いこの時期に狩りはやんねえが…かみさんがもうすぐガキを生みそうだな。だから精をつけさせようとイノウサを狩りに来たってわけだ。で、お前から、<旅行者>だろ。なんだってこんな山小屋にいたんだ？」

私はおじさんに魔法の世界からバタバタして、こちらに来てしまい移動場所がなぜか山の頂上付近だったいきさつを話した。

ゲツゲツゲ！そりゃ災難だ！とゲラゲラ笑いながら、おじさんは肉にかぶりつく。

「あの優男はなんて名前だ？誰かに似てるんだがなあ…」

「彼はンチャック・ツハイダーさんと言います。成り行きで一緒に旅行してます。」

おじさんが目を見開いて固まった。

「ンチャックさんがどうしたんですか？」

「ツハイダーだと！？本当か！！」

おじさんが私をガクガク揺さぶる。肉、肉が…

「間違いないです。」

彼の名前がどうしたのかな、まさか知り合いにいたりとかだったり…

「俺の村の最長老の名前と同じだ！！」

本当に知り合いだったー！！しかも最長老って…

おじさんは肉を急いで食べ終え、ものすごい勢いで捌いた肉や皮を持っていた袋に入れた。

「嬢ちゃん、兄ちゃんを呼んで来い！すぐ村に下りるぞ」

私も慌てるおじさんに急かされ、外でグッタリしてるイケメンさん
を呼んだ。

なんかイケメンさんの親戚が村にいるみたいだよ、と話したが気分
が悪いらしく頭が回らないようだ。

「ほら、兄ちゃん！具合が悪いならこれに乗れ！三人くらい大丈夫
だ。」

おじさんはどこに用意していたのか、ゴツイ馬を連れてきた。倍は
あるイケメンさんと私を軽く抱え馬に乗せた。

「村まで飛ばすからな！舌噛むなよ！」

すっかり霧の晴れた山の頂上から一気に駆け降りる。

いーやー、速い、速いって。あだっ、舌噛んだ。ああっ、イケメン
さんがずり落ちそう！おじさん、イケメンさん、私の順で無理矢理
乗ってるから狭いやら苦しいやら。

しかし、なんで毎回行く先行く先こうなるのか：イケメンさんの背
中に捕まりながら、絶対彼がトラブルをおびき寄せてるんだわ！と
自分のことは棚に上げて心の中でイケメンさんに悪態をついた。

村はまだかな…遙か先に見える村。いつ着くの…

暴走馬と化した私たちは村へと一直線に駆け抜けた。

異世界チケット使用4枚目です。その2（後書き）

次は村に入ります。ここで意外な人物に会います。

村人の身長はだいたい平均1〜1.3メートル。

山の麓に大きな村を作ってます。

そして、おじさんが旅行者に詳しい訳も判明します。

杏子さん、普通に動物を捌けます。素晴らしい。

異世界チケット使用4枚目です。その3(前書き)

脱字がちよいちょい見つかり凹みます。

その都度直してますのでご了承ください。

異世界チケット使用4枚目です。その3

いったいどれくらい駆け抜けたのか、山を抜けると急に開けた場所に出た。

きちんと周囲を石で組んだ壁に囲まれていて、村と言うにはかなり立派だった。文化的にも魔法の世界よりは発展してそう。狩猟民族なんだろうか、村の人はみんな狩人のスタイルだった。そして全員おなががりンゴみたいにくろくろしてる。男女関係ないってことはこの体型が標準ということか…異世界って本当に不思議がいっぱいだ。

そして、村の施設や住居など確かに立派なんだけど…全体的に小さい！とにかくいろいろスモールサイズ。

小人族だから仕方ないけど、あちこちで頭を打ちそうであつと不安になる。

さすがに村に入ってから速度を落とし、パカパカとゆったり進む。大きい私たちが珍しいのか、すごく注目されてる。特にンチャックさんに対する注目がすごい。村にいる知り合いと関係があるのかな？

「ゲンジさん、どこに向かっているんですか？何も聞かされずいきなり馬に乗せられたし…ンチャックさんも具合悪いし、先に休めるとこに行きたいです。」もはや口も聞けないイケメンさん。

血を見て目を回した拳げ句、暴走馬に振り回されダウン状態なイケメンさん。今にも砂になりそう、体を鍛えたんじゃないの？つて大いにツッコミたい。

「ああ。心配すんな、嬢ちゃん！長老んちで挨拶済ませたら、そのまま兄ちゃんも休めるぜえ。長老んちじゃねえと、村の宿じゃ小さすぎてお前ら絶対頭打つぜ。」

ゲツゲツゲと笑いながら村の奥へと進む。

すると、目の前にいきなりスモールサイズじゃなく、逆にかなり大きな建物が見えてきた。なんというかアパートのような集合住宅っぽい感じ。この村じゃ珍しい建物じゃないだろうか…

「あれが最長老他、俺らより身長が大きい奴らが住む家だ。馬を繋ぐから待ってな！」

ひよいと馬から降り、馬を繋いでイケメンさんを肩に担いだ。次いで私も降りる。かなりの強行軍で尻は痛いわ腰は痛いわ、早く体を休めたい…乗馬なんてしたことないんだから！

「よっしや、こつちだ。おゝい！長老！長老いるかあ？長老の親戚連れてきたぜ！ゲツゲツゲ」

また扉を豪快に開け、ドカドカ中に入るおじさん。

「なんだ？うるさいぞ！ああ、ゲンジか…背中に担えた奴とそちらのお嬢さんはく旅行者>か？こりやまた珍しい。」

長老と呼ばれ出てきた人は…イケメンさんよりさらに背の高いダンディなおじ様だった。おなかまわりがゲンジさんと同じで、残念なことになってるけど。雰囲気似てる、イケメンさんと同じ世界の
人だ。

「まずはようこそ、小人族の村くスモーラへ。君達を歓迎する。私は最長老のハチエツト・ツハイダーだ。そこでぐったりしてる若者もツハイダーだろう？ああ、君が想像する通り彼と私は同じ世界の者だ。ただ親戚とかではなく…。」
頭をポリポリかいて唸っている。

「それはあとで説明するとして、とにかく彼を休ませた方がいいな。来客用の部屋を貸すから使いたまえ。こっちだ」ゲンジおじさんからイケメンさんを受け取り、部屋へ案内してくれた。

イケメンさんをベッドに寝かせ、頭に冷やした手ぬぐいらしきものを乗せる。

「済まない…少し休んだら、マシになるとはおもっただが」

介抱しながら「気にしないでいいですよ、その代わりに、私が倒れたときには看病してくださいね！」

異世界移動を繰り返して、一緒に行動してるうちに…、なんだか放つて置けない存在になってしまったなあ。恋愛要素は皆無だけど。

「ああ、その時は豪快絢爛に看病してあげよう！任せてくれたまえ。」
「
顔色悪い人に言われてもまったく嬉しくないなあ。」

「ほほう、ずいぶんと仲がいいんだな？ひよっとして恋仲か？」
いきなり会話にハチエツトさんが入ってきた。

イケメンさんが真っ青な顔から、真っ赤な顔に変わった。

「きき、杏子さんはぼ、僕の恋人探しにつきあってくれてる異世界のゆ、友人です。こ、恋仲なんてそんな…」ベッドの上でモジモジするイケメンさん。

吃りすぎだし、なぜ顔を赤くするの！いつそんな恋愛フラグ立った？立ってないよね？！

ギツと私はイケメンさんを睨んだ。

そのやり取りを見てハチエツトさんが爆笑していた。

「ははは、からかって済まない。やはり同じ世界の者はからかいやすいな！ぶははは！」

ハチエツトさんが笑いのツボにはまったらしく、プヨプヨなお腹を抱えて悶絶している。なんだろう、このデジャヴユ。イケメンさんの世界には残念なタイプしかいないんだろうか…

「ああ、そういえば君の名前はゲンジから聞いたよ。ンチャック・ツハイダーだったね。年齢はいくつか数えているか？」急にキリツと話し出した。切り替えがすごい。

「年齢は1000を越えた辺りから数えてないです、多分300はいつてないとは思いますが…」

からかわれてムツとしていたけど回復してきたみたい。年齢を聞いて、ふむ…と少し考えてからこう切り出した。

「じゃあ、君が崇拜していた女性はイザベラか？」

「「！」「」」

私とイケメンさんは目を見開いた。

「やっぱりイザベラの被害者か…どうせイザベラに無理難題吹っかけられて、挙げ句振られたか約束を破られ自棄になって異世界旅行にでも出てきて恋人探しでもしようと思いい立ち、巨体な女性しか恋愛対象に見れないと思いい込んでるから、検索条件はそうだな…たぶんく巨乳で巨体とか体重200キロ以上とかの女性がたくさんいる…じゃないか？どうだ、アタリだろう。じゃないとこの世界にはなかなか旅行者は来ないからな」

どうだこの推理！と言わんばかりのいい笑顔でイケメンさんを見る。どこの探偵ですか！しかも全部アタリだし。

「なぜ僕に起きた事柄を見てきた様に…」

茫然とするイケメンさん。そうだね、私もびっくり！

「答えは単純さ、私が似たような状況でこの小人族の世界に来たからだ。ここにいるゲンジはく旅行者くである私を保護してくれたんだ。ここに来る前、一緒に旅行中のイザベラに殺されかけてね、とつさに帰還用に隠し持っていたチケットで移動したんだが、移動に精一杯で山の頂上付近で倒れてたらしい。随分前の話だが、思い出すだけでも忌々しい。」

苦々しい表情で当時を思い出しているんだろうか…かなり怖いですが、最長老ハチエツトさん。というかゲンジさん、奥さんのところに行かなくていいの？お肉が痛みますよ…

イザベラ、殺人未遂容疑か…待てよ？確かチケット使って帰ってこない人たちが結構いるって言ってたよね、ってまさか…まさかだよ。私がグルグル考えているとハチエツトさんが話の続きを始めた。

「じゃあ、どうして親戚でもない私と彼が同じ名前なのかそろそろ話してあげよう。多分聞いたらかなり不愉快になるかもしれないが

…いきさつはこうだ。イザベラは、昔から究極に面倒くさがり屋だ。いちいち言い寄ってくる男の名前を覚えるのも面倒くさがる。そして、彼女はこう考えた。名前を統一しよう。たまたま当時が一番のお気に入り私だっただけで、イザベラ担当の彼女に関わるものすべての名前は「お気にのツハイダーで統一ねー！」と勝手に決めただ、いい迷惑だったよ。1000人以上の男たちといきなり名前を統一されたからな。それは誰にも知らされていない事実だ。そしてそれを聞いた他の女性も真似して、世界の名前が極端に偏ることになった。女性崇拜教育には邪魔だから秘密にされてるが、それを变だと思つものも誰一人いないんだ。腐ってる、あの世界は。」
ケツとやさぐれる長老。ちょい悪長老ですね！でも話してすっきりしたのか

「じゃあ、彼の体調がよくなったら食堂に来てくれ。いつしよに夕食を食べよう。食べながら、この世界のことを話してやろう。」
と言い部屋を出て行ったのだった。

異世界チケット使用4枚目です。その3（後書き）

ものすごく傍若無人な元の世界の女性たち。なにか罰が当たってもいいと思う。

へたれで残念な性格は代々受け継がれるのかもしれない。女性には逆らえない呪いでもかかっているそう。

次回、長老がしゃべります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2104ba/>

異世界行きチケットを拾いました。

2012年1月14日12時53分発行